

昭和四年三月十五日(第三種郵便物認可)  
令和五年四月一日  
令和五年四月五日  
発印刷納行本

(毎月二回五日発行)

第九十六卷

第四号

第二三三二号

吉田苞竹創刊



令和五年(2023年)

四月号

第八十九回書壇院展特集(二二)



公益財団法人  
書壇院



顏氏聖舅家

居魯親里并

官聖妃在安

樂里。聖族之

(漢字臨書規定 8頁)

課題

半切 顏氏より樂里まで (十七字)  
半紙 家居魯親里 (五字)



# ナスと『十七帖』

飯山素木

食べ物の話。「何が好き?」「ナス」「どんなにして食べるの?」「ナス雑炊」「おいしい?」「これがないと生きられない。昔は夏にしか食べられなかった。お盆が過ぎるとナスとの別れが近づいて、とても悲しく辛かった。今は高知ナスなどが一年中食べられるから、この上ナスの仕合わせ」。

ナスなくば なんて生きらりよ

冬場にも スーパーに並ぶ いとしき高知ナス

次は書の話。『十七帖』。高校卒る頃だったろうか。先輩に「これ知ってる?」と見せてもらったのが晩翠軒刊の三井本。欲しかった。手持ちは清雅堂刊の餘清齋帖本だった。

上京して間もなく、神田神保町あたりの店で三井本とおぼしき物を見て買った。安物でいけないものだった(それから六十余年、今だに晩翠軒刊本は買えてない)。

のち、二玄社刊の三井本を、ほぼ原寸で、一日に二回から三回全臨した。一度だけ四臨したことがある。早朝から夜中まで休みなし。トイレのみで食事なし。とうとう三十五臨くらいでギブアップ。二十九歳、独身。

八十歳を過ぎ、臨書しなくなつて、なんと『十七帖』が見えて来た。そして、七十歳代までは全く見えていなかったことに気付いたのだ。

本当に見えているのか。気が狂ったのか。自分には分からない。しかし、ナスのように旨くてたまらない。この上ナスの仕合わせ。

## 令和五年 書壇 四月号 目次

表紙Ⅱ書壇院蔵 論経書詩

題字 集鄭道昭書

古典研究.....表2

巻頭言.....飯山素木 1

同人参考手本 飯山素木・勝山菁梅 2

未瑛・春淵・軒雨・有紅

町田玄洞・柴田李笙

### 競書課題

漢字規定 元斑妻穆玉容墓誌銘・苞竹吉田先生之碑 5

かな規定.....福谷玲子 6

南画規定.....工藤浪葉 7

漢字臨書規定 細田秋僊・細小路沈玉 8

かな臨書規定 星野静代・柴田千鶴子 9

日本文.....平井侗子・菊田竹子 10

篆刻入門.....益満丁 11

### 第八十九回書壇院展特集

役員作品.....12

書壇院ギャラリー案内.....31

第一二六回審査委員会遊苑.....31

毎日書道展《漢字部》作品検討会.....32

第57回高野山競書大会案内.....33

書壇院日記.....33

### 第二一三一回選書

写真・批評.....34

成績発表.....46

五月六日締切課題予告.....61

パソコンド券申込書.....62

応募規定・競書出品方法.....63

書画の鑑賞.....表4

柳澤朱篁.....表4

飯山素木書

ラーメンは スープのこせと わが  
 ちちは そばをのこしき  
 われのこさず 八十六 三九好

— 自詠 —

ラーメンは スープのこせと わがちちは そばをのこしき われのこさず八十六

勝山菁梅書

わが室極人偏恋る物修新雲處出海  
 暖梅柳底江春汗氣傳黃多晴光轉  
 緑蕪忽聞歌古調歸思欲沾巾

— 杜審言詩 —

獨<sup>リ</sup>有<sup>リ</sup>宜<sup>ニ</sup>遊<sup>ブ</sup>人<sup>ノ</sup>偏<sup>ニ</sup>驚<sup>ケ</sup>物<sup>ノ</sup>候<sup>ハ</sup>新<sup>ナル</sup>雲<sup>ニ</sup>霞<sup>ニ</sup>出<sup>デ</sup>海<sup>ヲ</sup>曙<sup>ケ</sup>梅<sup>ノ</sup>柳<sup>ノ</sup>度<sup>ツ</sup>江<sup>ヲ</sup>春<sup>ナリ</sup>淑<sup>ク</sup>氣<sup>ニ</sup>催<sup>シ</sup>黃<sup>ニ</sup>鳥<sup>ヲ</sup>  
 晴<sup>ク</sup>光<sup>ヲ</sup>轉<sup>ス</sup>綠<sup>ニ</sup>蕪<sup>ニ</sup>忽<sup>チ</sup>聞<sup>ク</sup>歌<sup>ヲ</sup>古<sup>ク</sup>調<sup>ヲ</sup>歸<sup>ル</sup>思<sup>ハ</sup>欲<sup>ス</sup>沾<sup>レ</sup>巾<sup>ヲ</sup>  
 (名詩類選評釋)



款冬花<sup>サツ</sup>於<sup>ニ</sup>嚴寒<sup>ニ</sup>

董仲舒句

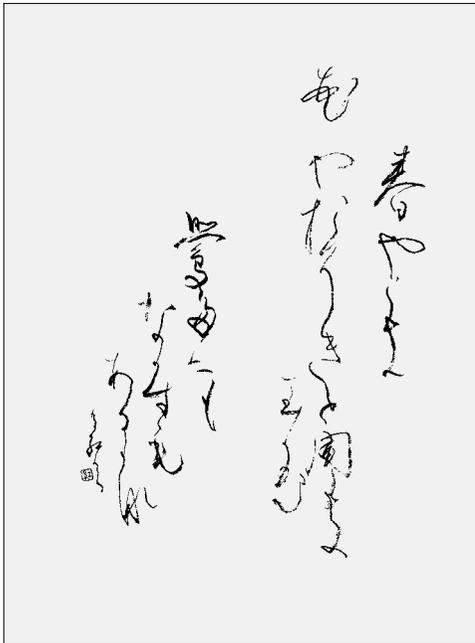
小林春淵書



竹<sup>ハ</sup>深<sup>ク</sup>荷<sup>ハ</sup>淨<sup>シ</sup>

梁同句

小林未瑛書



春<sup>支</sup>や<sup>可</sup>と<sup>毛</sup>き<sup>可</sup>花<sup>支</sup>や<sup>於</sup>お<sup>曾</sup>そ<sup>可</sup>き<sup>可</sup>と<sup>支</sup>聞<sup>支</sup>き<sup>支</sup>わ<sup>支</sup>か<sup>支</sup>む<sup>支</sup>鶯<sup>多</sup>だ<sup>二</sup>に<sup>二</sup>も<sup>鳴</sup>

藤原言直の歌

池澤有紅書



林<sup>ノ</sup>間<sup>ノ</sup>鶴<sup>ノ</sup>帯<sup>ビ</sup>雲<sup>ヲ</sup>還<sup>ル</sup>

倪瓚句

西村軒雨書

同人参考手本

2尺×6尺額用

町田玄洞書

今夕重門啓。遊春得夜芳。月華連晝色。燈影雜星光。南陌  
 青絲騎。東鄰紅粉妝。管絃遙辨曲。羅綺暗聞香。人擁行歌  
 路。車攢鬪舞場。經過猶未已。鐘鼓出長楊。  
(墨場必携歷代律詩選)

—蘇味道詩—

柴田李笙書

千里鶯啼綠映紅。水村山郭酒旗風。南朝四百八十寺  
 多少樓臺烟雨中。  
三休詩(上)

—杜牧詩—

今夕重門啓。遊春得夜芳。月華連晝色。燈影雜星光。南陌  
 青絲騎。東鄰紅粉妝。管絃遙辨曲。羅綺暗聞香。人擁行歌  
 路。車攢鬪舞場。經過猶未已。鐘鼓出長楊。  
(墨場必携歷代律詩選)

用紙 紅星牌 棉料棉連 筆 和筆・中鋒六号

千里鶯啼綠映紅。水村山郭酒旗風。南朝四百八十寺  
 多少樓臺烟雨中。  
三休詩(上)

用紙 紅星牌 筆 和筆・中鋒三号

四月五日締切(臨書)

漢字規定

上位く特位課題

晨昏から晦曖まで三十二字を小字用箋に三行に書くこと。落款は○○臨とする。

英位く六位課題

贄日から月中まで十字を半紙に三行に書くこと。落款は○○臨とする。(野は引かぬこと)

半紙

贄日下部  
鳴鶴十一  
月中○○臨

元斑妻穆玉容墓誌銘

北魏・神龜二年(五一九)十月二十七日。四八・〇×四八・七cm。蓋石六行、一行五字、誌石全二十行、一行二十字、二十七歳で卒した穆玉容の墓誌。夫の墓誌とともに出土。原石は陝西省博物館(西安碑林)に現存する。課題は『北魏・隋 墓誌銘集(下)』(中国法書選26 二玄社)を使用しました。



晨昏礼備。箴諫道存。奉上崇敬。接下喻温。鄰無濁議。邑有清論。綺皂虚。自虚腴。妍姿晦曖。溢媚纖腰。

苞竹吉田先生之碑

書壇院創設者 吉田苞竹先生の顕彰碑です。



贄日下部 鳴鶴 十一 月中

※文の切れ目は考えないこととします。

次号課題(予告) 61頁参照

四月五日締切

# かな規定

半紙縦書

## 極位・準極位課題

吹く風の 心と散らす 花  
 ならば 梢こすえに残す 春もあ  
 れかし

(藤原俊成)

## 妙位〜6位課題

花をのみ三 待つらむ人三に耳  
 山里農の 雪間能の草乃の 春者流を手  
 見世八せばや

(藤原家隆)

次号課題 (予告)

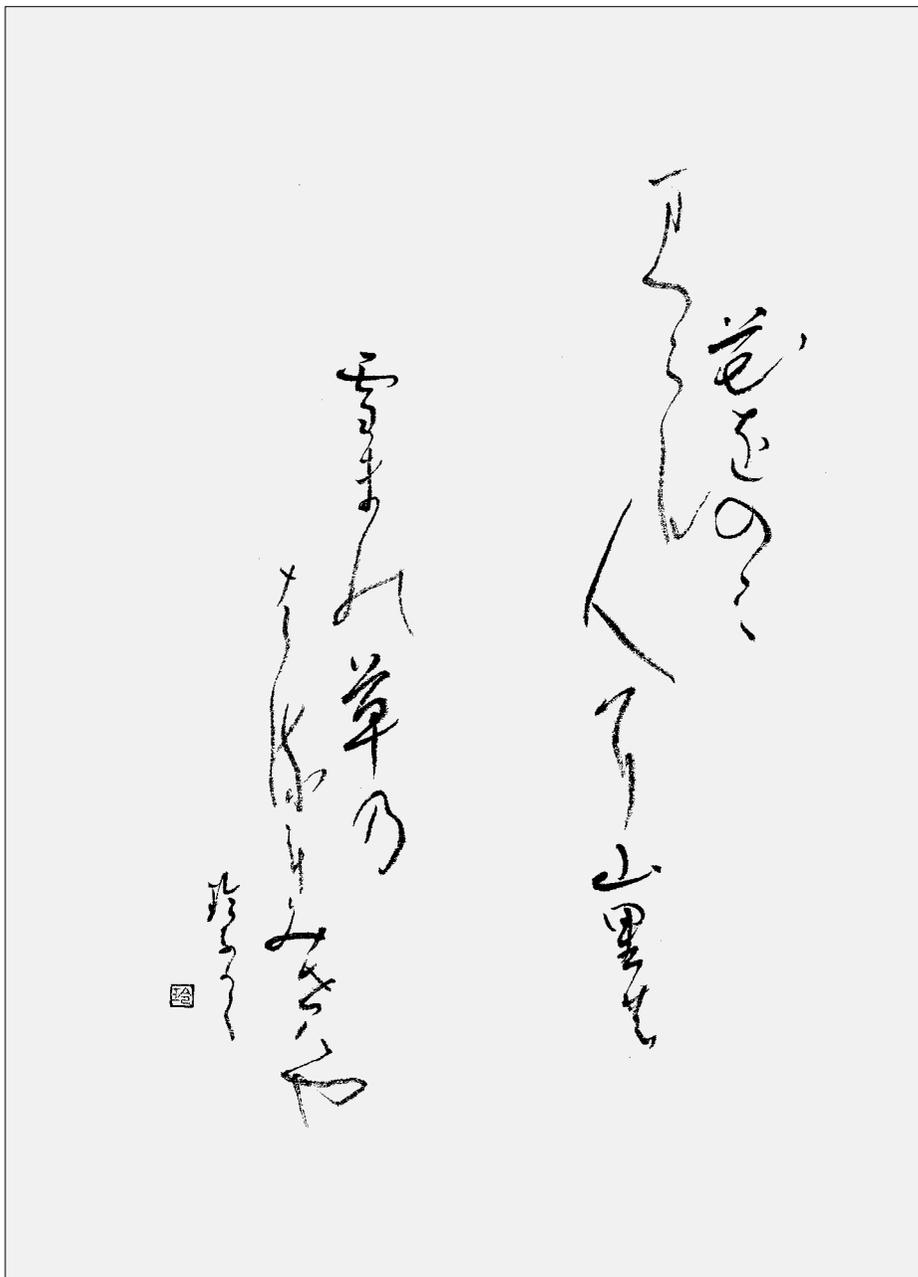
61頁参照

参考手本

妙位〜6位

福谷玲子書

※かな漢字相互の変換、ちらし自由。落款は○○かく+印。



ちらしを工夫しながら作品を仕立てましょう。

四月五日締切

南画規定

南画初学講座(一一一)

工藤浪葉

※横三十五センチ、縦二十七センチ(小画仙紙半切五分の二)の用紙を横に揮毫のこと。

今月から課題が菊になります。今回は大きな花、蕾、小菊、草を描きます。

最初は花の位置と向きを決めます。

二つの花は中心から勢いよく二本線で立体的に変化をつけて描きます。

花芯は濃墨で加点しましょう。

茎は曲折をしっかりとつけてください。

葉はたつぷりと濃墨を含ませた側筆で墨色を生かします。

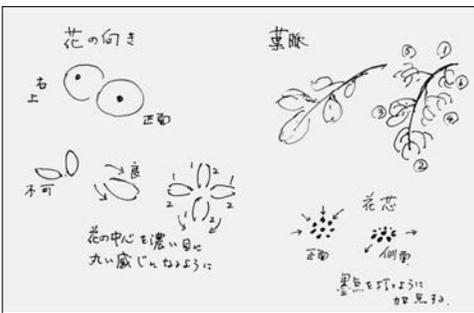
葉脈は葉が生乾きなうちに濃墨で葉の根元から先端に向けて描きます。

これで菊の表情が豊かになります。

小菊は付立で葉も淡墨で描きます。

画賛は「東籬佳色」です。

参考 大久保楓紅画



次号課題(予告) 61頁参照

四月五日締切

漢字臨書規定

小画仙紙半切・半紙縦書

参考資料表紙内側

礼器碑



細田 秋 儼

礼器碑は、後漢の永寿二年（一五六年）に刻された石碑で、山東省曲阜市の孔子廟内に現存する。碑の大きさは一六五cm×七四cmの四面碑である。題額はなく名称も定まらない。

碑陽は一六行、行ごとに三六字で序、銘および韓勅かんちやくら九人の題名が刻されている。碑陰は三段各段ごとに一七行、碑側左は三段、

細田 秋 儼 臨 半切参考手本（上位／六位）

各段ごとに四行、右側は四段、各段ごとに四行で、ともに寄付した官職、姓名、贖金額を入れていく。

序、銘の内容は、魯相の韓勅（字は叔節）が孔子廟を修理したことや、祭祀に用いる各種の器物を修造して礼楽を復興し、国に尽くしたことなどその功績を讃えたものである。

撰文者、書者は共に不明であるが漢代の石碑としては名文とされる。線の太細の変化は巧みに織り交ぜた典型的な八分隸による書法で「金石の神品」と評されるほど精妙を極めている。

清末の楊守敬はこの碑の隸書を絶賛して、「性情」と「形質」の両方を高度に兼備する逸品であり漢代の隸書碑の中では白眉とすべ

き存在であると言っている。

さて、今回の課題は一七文字、臨書に当たっては穂先の弾力を十分に使い、細身ながら多彩な変化を各点画に表現し、隸書の特徴である横平豎直を基本結体として臨してください。

好臨を期待しています。

顔氏聖魯家居魯親里并  
官聖妃左安樂里

新修 漢 碑

家居魯  
親里

漢 碑

細小路 泂玉 臨半紙参考手本（上位／六位）

次号課題（予告）

61頁参照

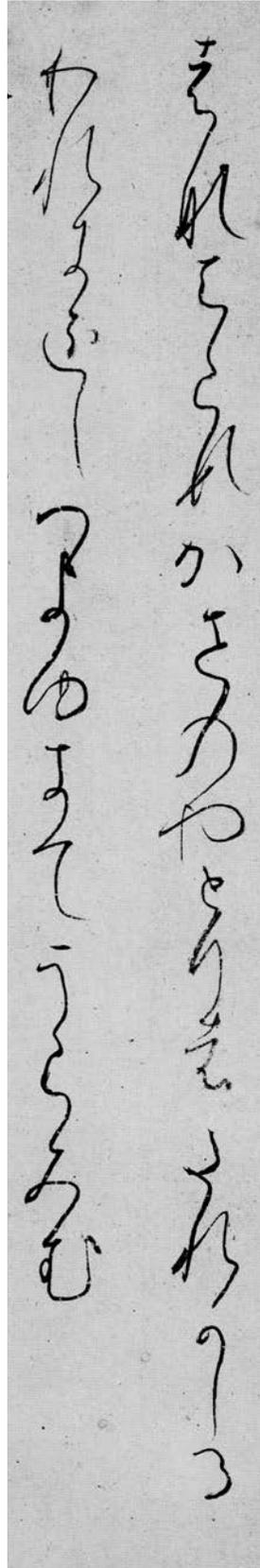
四月五日締切

かな臨書規定 高野切第二種 一四一 半紙縦半切

極位〜2位

左を半紙縦半切に臨書すること

(二) 玄社 日本名筆選③



は<sup>者</sup>な<sup>那</sup>ち<sup>知</sup>ら<sup>教</sup>す か<sup>世</sup>ぜ<sup>世</sup>の<sup>世</sup>や<sup>世</sup>ど<sup>世</sup>り<sup>世</sup>は た<sup>多</sup>れ<sup>多</sup>か<sup>多</sup>し<sup>多</sup>る わ<sup>尔</sup>れ<sup>尔</sup>に<sup>尔</sup>を<sup>尔</sup>し<sup>尔</sup>へ<sup>尔</sup>よ ゆ<sup>支</sup>き<sup>支</sup>て<sup>支</sup>う<sup>支</sup>ら<sup>支</sup>み<sup>支</sup>む

『高野切』の名称は、この一部が高野山に伝わったことからつけられました。尚、切とは断片を意味します。課題の歌は、咲いた桜を吹き散らす無情な風を人にとえて詠んだ素性法師の歌。墨色の濃淡美しく、粘りと張りのある強靱な線で書かれた二行の響き合いが絶妙。筆者の能書ぶりが伝わります。墨継ぎは四箇所。一句目の「な」<sup>那</sup>「す」<sup>教</sup>、三・四句目の「れ」の右肩上がりの字形に注意です。起筆、収筆、送筆、転折等、線の変化を捉えて、じっくりと筆を運びましょう。

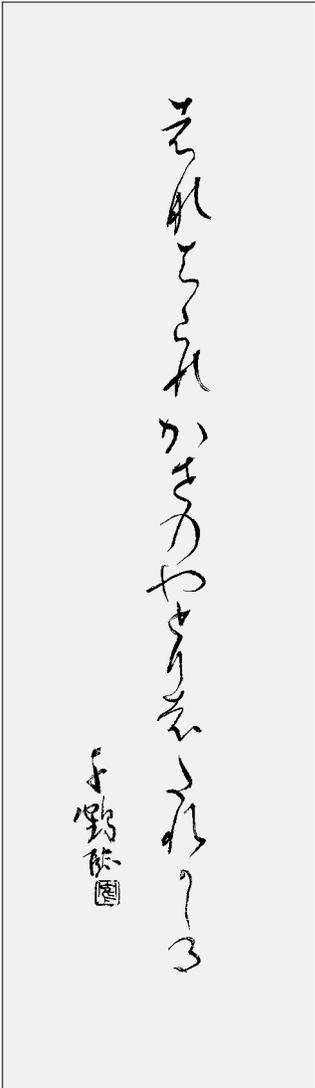
(星野静代)

3位〜6位参考手本 柴<sup>しほ</sup>田<sup>た</sup> 千<sup>ちづこ</sup>鶴<sup>づこ</sup>子<sup>こ</sup> 臨

3位〜6位

半紙縦半切に臨書すること

は<sup>者</sup>な<sup>那</sup>ち<sup>知</sup>ら<sup>教</sup>す か<sup>世</sup>ぜ<sup>世</sup>の<sup>世</sup>や<sup>世</sup>ど<sup>世</sup>り<sup>世</sup>は た<sup>多</sup>れ<sup>多</sup>か<sup>多</sup>し<sup>多</sup>る



次号課題  
(予告)  
61頁参照

4月5日締切 日本文

①条幅規定 半切タテ 参考手本 平井侘子書



自然な運筆を心掛けました。残と涙は旧字体で書きました。

眺むべき 残りの春を かぞふれば 花とともに 散る涙かな

(俊恵)

②半紙規定 タテ



参考手本

菊田竹子書

窓明けて 蝶を見送る 野原かな (小林一茶)

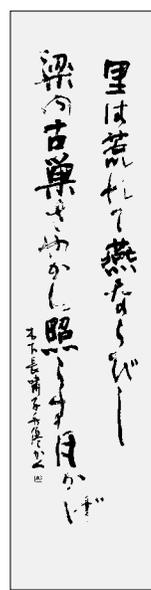
③半紙随意 書体・文言自由。半紙ヨコ

予告 五月六日締切課題

- 半紙・条幅規定 手本参照
- 半紙随意 半紙タテとする

・日本文の級位を書くこと。著作権に注意すること。

条幅規定 タテ 細田秋僊書



里は荒れて 燕ならびし 梁 (うつはり) の 古巣 (うづす) やかに 照らす月 (てるつき) かけ (かぎ) (木下長嘯子)

玉井菁雪書

花いばら 古郷の路に 似たる哉 (与謝蕪村)



# 篆刻入門

(二四二)

益満丁ますみつてい 盒あは

## 四月五日締切課題

- 規定「學海」
- 随意（または篆刻を含む）
- 印は3cm以内、篆刻は原印大とします。

○63・64頁応募規定をご覧ください。  
い。  
※出品票を貼ったバーコード券を必ず貼付してください。

規定参考 益満丁ますみつてい 盒あは 作



學海（海を学ぶ）学問は中途でやめてはいけない。

## 《応募作品アドバイス》

今月の課題は「思無邪」でした。地割りは一文字二文字、二文字一文字、横三文字のいずれでも纏まりそうな印文です。参考印影は無の異体字「无」を用いました。「无」は説文に奇字とありますが、秦で用いられた無の簡体のようなです。

### 規定

○流芳さん、ごまかしのない堂々とした作風です。線も深く温かみもあり、思の上部の崩しも利いています。この風韻を更に深めてください。



堀 流芳



小林 賢



市瀬 石春



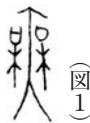
柴 蘭陽

○賢さん、古璽風にまとめた凍とした作風です。古璽文に無字がなく、甲骨文に近い形を採用なさいました。古璽小印は戦国時代の晋系の文字になりますので、このような場合は、同じ晋で使われていた文字を採用すると良いでしょう（図1）。工具書（字書類）として戦国古文字を分域した何琳儀『戦国古文字典 戦国文字声系上下冊』（中華書局 二〇一二年）をおすすめします。

○石春さん、動きがあり、余白も活きた佳作です。  
○蘭陽さん、線に落ち着きがあり、布字も穏当です。下辺の古拙が縦向きに刀痕が並んでおり、変化が欲しいところですが、邪の邑部の縦画が本来あるべき一段下に配置されており、たとえ字書に見えてもこのようなイレギュラーな体は使わない方がいいです。

### 随意

篆刻課題は「順陵園丞」でした。○賢さん、完璧な篆刻です。言うことなしです。  
○秀明さん、創作「大願成就」です。時間をかけた跡が見られ熱意を感じます。文字と融合するような辺縁の処理が必要です。古人の印を観察なさり、撃辺のコツを掴んでみてください。期待しております。



（図1）  
の印を観察なさり、撃辺のコツを掴んでみてください。期待しております。

## 摹刻参考



宜春禁丞



小林 賢



松本 秀明

五月六日締切規定予告

「人生如寄」